The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『隆季集』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1983, 41, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『隆季集』の成立

三村晃功

一

土御門中納言藤原家成の男で、保元三年非参議従三位を経て、正二位・権大納言に至り、寿永元年出家。『久安百首』の作者に追加され、『詞花集』以下に一一首の入集をみる平安後期の歌人、藤原隆季（一一二七～没年不詳）に私家集があったらしいことは、福井久蔵氏が『大日本歌書綜覧中巻』（大正15・8）で、「隆季集　写一巻　集はものに見えたれど夙く佚したるか」と推定されていることによって予想されるが、現在のところ、隆季の私家集は探し得ず、それとは趣を異にする私撰集が伝存している。彰考館文庫と井上宗雄氏の御所蔵にかかる『隆季集』が当該書で、本書はすでに、「中世私撰集解題(その一)」（『和歌文学研究』第十四号、昭和37・10）と『和歌文学大辞典』（昭和37・11）の当該項目に、井上宗雄氏（後者は森本元子氏と共同執筆）による簡にして要を得た紹介がなされている。そこで、次に便宜上、『和歌文学大辞典』から当該記事を引用させていただき、本稿の端緒にしたいと思う。

隆季集（たかすえしゅう）　伝本は彰考館文庫に『匡衡集』と合綴の一冊があり、明応二1493・六中旬右京亮量胤の本をもって写した由の奥書がある（小山田本）。井上宗雄本も同系（文久三1863 みなもとのただなを書写）。春一四二、夏一〇二、秋六四、冬三三、釈教・神祇・歳暮・祝各一、恋二五、計三七〇首を収める。「隆季集」とは題するが、実は中世成立の私撰集で隆季の集ではない。平安・鎌倉時代の和歌を部類したものである。作者名・会記はすべて取り払われている。

この井上・森本両氏の的確な記述によって、『隆季集』の内容・成立の問題はほぼ明らめられて、いまさら事新しく付加すべきことはあまりない。しかし、本書が「平安・鎌倉時代の和歌を部類した」撰集であることには違いないが、具体的にいかなる出典資料から、いかなる歌人の詠を採録しているのか、そして、本書はいかなる性格を有する撰集で、その撰集目的は何であったのかの言及は不可欠であろうし、また、本書が「中世成立の私撰集」には相違なかろうが、その成立時期はおおよそいつごろであるのかの検討も是非必要であろう。

かかる次第で、以下は井上氏らの成果に基づいた『隆季集』の出典資料の闡明をとおして成立の問題に言及した拙い報告であるが、大方の御叱正を賜わらば、幸甚である。

二

さて、『隆季集』の精査に入る前に、底本とした井上宗雄氏御所蔵の『隆季集』の書誌的説明をしておこう。本書は縦二二・七糎、横一六・一糎の袋綴写本一冊。表紙は朱色下地に鶴の模様を押す。題簽は左肩に「隆季集」。内題も同じく「隆季集」。本文料紙は楮紙で、一面一〇行書。歌一首一行書で、歌題は本文より五字下げ。遊紙はなく、墨付三六丁。一丁オに「宮崎蔵書」「はなの屋」「堀田文庫」の旧蔵印と、「井上宗雄蔵書」の現蔵印がある。巻末に、「右隆季集右京亮量胤之本全（ママ）／備用（ママ）写留者也／于時明応二年林鐘中旬／尚保在判」なる奥書（墨書）と、「諸家伝補任云隆季権大納言正三（ママ）位云々　○系図修理大夫／顕季四代孫四條権大納言正三位藤原隆季母加賀守／高階宗章女／夫林抄ニ歌多ク入レリ」なる注記（朱書）と、「文久三年十一月四日写之／みなもとのたゝなを」なる識語（墨書）がある。彰考館文庫本の転写本と推定される。

ところで、『隆季集』が隆季の詠を収めた私家集ではなく、他人の歌から成る私撰集である点については、たとえば、「浦のかすみを」の例歌

(1)須摩（ママ）のあまのこほりし袖の浦波に春は霞のもしほたれつゝ
（浦のかすみを・一四）

(2)いく春の霞のしたに埋れておとろの道に跡をとふらん
（同・一五）

(3)雪消る萩のやけ原霞こめたてぬ煙にもゆる若草　（同・一五）

のうち、(1)が『俊成卿女集』の俊成女の詠、(2)が『拾遺愚草』の定家の詠、(3)が『正治再度百首』の長明の詠であることから明白であろう。ここに、『隆季集』は私撰集であることが示唆され、『隆季集』の内容（性格）を把握する第一段階として、『隆季集』の収載歌の作者面からの検討が要請されよう。そこで、『隆季集』の実態を紹介する意味も含めて、現在までに確認しえた『隆季集』の収載歌三七〇首の典拠および作者を整理すると、次のごとくなる。

〔草根集〕20・21・25・29・30・44・63～70・82・84・87・88・93・95・121・133・134・136～141・166・202～204・235・237・238・240・254・270・274・277・319～327・339・340

〔林葉集〕34・37・40・49・55～58・77～79・86・112・115～117・120・135・142・144・145・147・148・150・199～201・205～207・211・216・217・220～230・232・239・242・283・312～315

〔宋雅千首〕26・33・36・38・45・48・54・59・83・126・127・129・132・160・179・180・182・185・190・194・214・218・219・222・233・234・253・257・262・263・265・282・286・293・296・298・299・303・304・308

〔肖柏千首〕24・32・39・50・52・60・62・80・81・90・128・130・131・162～165・184・187・191～193・195・197・198・215・221・223・236・244

〔古今六帖〕17・23・28・149・367（躬恒）・85・158・243・247・249・260・278・349・350・353・358・359・368～370（作者不記）・151・159・174・175（貫之）・176（醍醐天皇）・256（定方）・258（敏行）・273（忠岑）・285（人麿）・305（道真）・363（深養父）・364（寄香）

〔俊成卿女集〕7・9・10・14・156・157・170・173・177・181・209・245・264・267～269・287・289・309・329・330・346・347・354・356・357・361・362・365・366

〔拾遺愚草〕 11・13・15・94・98・108・113・119・124・189・213・348・352・355・360
〔頼政集〕 42・123・152・153・224・252・291・292・302・328・334～336
〔長明集〕 104・118・125・143・167・208・210・212・266・288・290・311・344
〔宝治二年歌合〕 96（小宰相）・99（通忠）・101（有教）・105・168（蓮性）・106（師継）・107（下野）・109（少将内侍）・111（越前）・169（為氏）
〔正治再度百首〕 16・27・35・331・333・342・343・345（長明）
〔曽丹集〕 8・47・110・114・246・251・275
〔散木奇歌集〕 171・196・225～227
〔為尹千首〕 43・46・51・172
〔元真集〕 61・97・307
〔古今集〕 89（素性）・285（人麿）
〔天徳内裏歌合〕 122（中務）・146（兼盛）
〔源重之集〕 228・310
〔和泉式部集〕 103・229
〔堀河百首〕 92（顕季）・248（匡房）
〔新勅撰集〕 5（好忠）・272（読人不知）
〔桜井基佐集〕 154・297
〔家持集〕 186
〔亭子院歌合〕 74（是則）
〔素性法師集〕 73
〔兼盛集〕 306
〔金葉集〕 317（顕季）
〔千載集〕 318（道因）
〔新古今集〕 351（長明）
〔続古今集〕 316（俊成）
〔玉葉集〕 341（基忠）
〔続後拾遺集〕 183（匡房）
〔風雅集〕 71（定円）
〔出典不詳〕 1～4・6・12・18・19・22・31・41・53・72・75・76・91・100・102・155・161・178・188・241・250・255・271・276・280・300・332・337・338

ちなみに、この整理の注記をしておくならば、算用数字は『隆季集』収載歌三七〇首に仮りに付した一連番号であり、カッコ内の注記は当該歌の作者であることを意味する（個人の家集、定数歌の場合は省略した）。この整理によって、『隆季集』三七〇首のうち、三三八首の典拠および作者が明白になったが、なお整理して部立別出典資料表を作成すれば、次表のごとくなる。

出典資料	春	夏	秋	冬	恋	計
草根集	29	8	4	11		52
林葉集	19	20	1	4		44
宋雅千首	13	13	14			40
肖柏千首	13	17	8			38
古今六帖	4	8	9			32
俊成卿女集	4	7	7	3	9	30
拾遺愚草	9	2			4	15
頼政集	2	3	4	4		13
長明集	3	5	3	2		13
宝治二年歌合	8	2				10
正治再度百首	3					
曽丹集	4					
散木奇歌集		5				
為尹千首		1				
元真集			1			
天徳内裏歌合		1				
源重之集			1			
和泉式部集		1				
堀河百首		1	1			
新勅撰集			1			
桜井基佐集						

	家持集	古今集	亭子院歌合	素性集	兼盛集	金葉集	千載集	新古今集	計
142				1					18
102			1						5
64					1				6
37		1				1			3
25									
370	1	1	1	1	1	1	1	1	32

	統古今集	玉葉集	続後拾遺集	風雅集	出典不詳	計
142				1	18	
102			1		5	
64					6	
37		1			3	
25						
370	1	1	1	1	32	

このうち、釈教以下の四首は便宜上冬部に入れた。また、二首、一首の出典資料は『隆季集』の編者が直接参看したものとも思われず、これらの歌を一括収載する類題歌集などから採録された可能性が強いが、これも便宜上参考までに掲げておいた。この表によって『隆季集』は、円融・花山両朝頃の成立と考えられる『古今六帖』『曽丹集』などの類題歌集・私家集、源俊頼の最晩年の成立とおぼしき『散木奇歌集』なる私家集、新古今時代前の歌林苑歌人の『林葉集』『頼政集』『長明集』『正治再度百首』などの私家集・定数歌、後鳥羽院時代の『拾遺愚草』『俊成卿女集』、後嵯峨院時代の『宝治二年歌合』などの私家集・歌合、室町中期ごろに成立をみた『為尹千首』『草根集』『宋雅千首』『肖柏千首』などの定数歌・私家集から撰集されていることが知られ、時間的にはかなり広範囲にわたる出典資料をその撰集対象にしていると言えよう。しかし、その出典資料を吟味するに、それらはある程度の共通性をもつ出典資料であって、そこには『隆季集』の編者の編纂意図が明確にうち出されているように推察される。その『隆季集』の性格などについては後述するとして、とりあえずここには、出典不詳となっている三二首を列挙して、『隆季集』の全貌の紹介をしておきたいと思う。

(4)あまの戸のあくる日影は三笠山さして来ぬらん春の色みゆ
（たつ春のあした物へまかりてよみ侍りける・一）

(5)をとめ子か袖ふる雪の空晴て天津□（ママ）より春やきぬらん
（おなしこゝろを・二）

(6)雪霜にたへてし空も今朝ははや霞先立春やきぬらん
（ふるきなかめに・三）

(7)氷ゐて流れ絶へにし太山川はや立春とつれて来にけり（同・四）

(8)四方山は春めきにけるみよしのゝ□（本ノマヽ）（野霞・六）

(9)山もとをこめてしもこそ朝霞春のあかれは色増りけり
（あしたの霞を・一二）

(10)若菜摘をのゝ雪間を見わたせは目も春やかに朝緑なる（わかな・一八）

(11)一しほの緑は見えて松風の春としもなきおとさむけき（ママ）
（余寒・一九）

(12)かつきゆる岩根をあらふ淡雪のにしこる（ママ）山の井のみつ
（淡雪・二二）

(13)立こむる霞をこめて谷川のひゝきに消るうくひすの声
（〈暁鶯〉・三一）

(14)春の色も見えぬ籬の呉竹に花まつ程に鶯の鳴
（梅に鶯鳴けるを・四一）

(15)道のへの梅か香匂ふ夕風にまた見ぬかたの盛をそ見る
（梅香・五三）

(16)河柳もくすをえたに置とめて岩越水の程そしらるゝ
（川柳・七二）

(17)下萠のふる木の柳下もえて煙物うき春の色かな
（古木柳・七五）
(18)あさあけの山桜戸の玉柳たれまつ花の友となるらん
（七六）
(19)早厥のもえ出ぬらん春のゝに焼原あさる人しけくみゆ
（わらひ・九一）
(20)桜花をちのさとまて詠らんあたにをらすな春の山寺
（桜を見るこゝろを・一〇〇）
(21)たすね見花の所もかはりけり身は徒の詠せしまに
（おなし心を・一〇二）
(22)世にふれはしとろに見ゆる山賤のおとろのかみも葵かけたり
（葵・一五五）
(23)隠れ沼の底におふれる菖蒲草こめにひなてみる人は見つ
（あやめ・一六一）
(24)うち羽ふき今そ鳴なる時鳥卯の花月夜さかりなる比
（〈おなし〉・一七八）
(25)たれしかも初音聞らん郭公またぬ山路にこゝろつくまて
（杜鵑・一八八）
(26)夏も猶雪けの末の水ならはふちの河こそ冬こゝちすれ
（水辺納涼・二四一）
(27)七日ひのはやくれならん久かたの天の川霧立わたるへて
（七夕・二五〇）
(28)はかなさもよしや思ほし山さとのすゝのまかきの露の槿
（あさかほ・二五五）
(29)若なくと人にはつけそ小萩原分つゝ来てもつらきあはすて
（萩・二七一）
(30)秋なから落葉もしらぬ松虫の声うつもれる野への初霜
（おなし・二七六）
(31)玉梓のそら引かへす心ちして雲のあなたになのる鴈金
（鴈の声遠くきく・二八〇）
(32)故郷に来てかへるへき秋や猶紅葉の錦秋やそふらん
（紅葉・三〇〇）
(33)雪すかる籬の竹のおとのみそ時ゝ我をおとろかしける
（間居雪・三三二）
(34)したにこそのへの庵はさしつるに思はぬよはの雪のうはふき
（野宿雪・三三七）
(35)あらし降（ママ）る神のしるしの榊葉に雪のしらゆふかけそへてけり
（雪中神楽・三三八）

以上の三二首が『隆季集』収載歌のうちの出典不詳歌だが、この出典不詳歌には作者注記のない点が惜しまれるとはいえ、新出歌の可能性は多分にあろう。

三

さて、『隆季集』の収載歌の典拠調査によって、三七〇首中の三三八首の出典が明白になり、この数値は全体の九一パーセントに相当するので、ここで『隆季集』の性格に一言しておきたいと思う。

『隆季集』が特定の歌人の私家集および定数歌などによって撰集されていることはすでに言及したとおりだが、ここで『隆季集』収載歌の出典調査によって明白になった三三八首の作者について整理すれば、次のごとくなる。

正徹　52首、俊恵　44首、宋雅　40首、肖柏　38首、俊成女

30首、長明　22首、定家・作者不記　15首[1]、頼政　13首、好忠　8首、躬恒・俊頼　5首、貫之・為尹　4首、元真　3首、素性・兼盛・重之・和泉式部・匡房・顕季・蓮性・基佐　2首、人麿・家持・是則・中務・醍醐天皇・寄香・深養父・忠峯・定方・道真・敏行・道因・俊成・為氏・越前・下野・師継・小宰相・少将内侍・通忠・有教・基忠・定円・読人不知　1首。

すなわち、『隆季集』の編者は、まず、正徹・宋雅・肖柏などの室町中期歌壇の実質の指導者の詠を中核にし、次いで、俊恵・長明・頼政などの歌林苑歌人の詠と俊成女・定家などの新古今歌人の詠を添加、さらに、貫之・躬恒などの古今時代の詠も付加して撰集している実態を、ここに知り得よう。したがって、これらの各時代を画する時期の著名歌人の歌はいかなる性格のものであるかを検討するに、まず注目されるのが『為尹千首』『宋雅千首』『肖柏千首』などの千首歌が『隆季集』の主要部分を占めている事実である。ところで、これらの千首は千首歌のモデルとも称されている『為家千首』と同題で詠まれているので[2]、『隆季集』がこれら題詠歌の最大級の歌書から採歌しているということは、『隆季集』の編者が題詠歌の手本ともなるべき歌で編纂した、いわば題詠歌の手引書のごとき撰集を編もうとした編纂意図を示唆していよう。この点は、『俊成卿女集』からの採歌が「洞院摂政家百首」を中心として「北山五十首」「千五百番歌合」「衛門督殿への百首」などの題詠歌で占められ、『拾遺愚草』からの抄出歌が「関居百首」「関白左大臣家百首」などの題詠歌であることや、『林葉集』『頼政集』『長明集』『正治再度百首』からの採録歌もすべて題詠歌群からの抄出であることから確認されよう。そしてまた、『草根集』からの正徹の詠もすべて題詠歌だが、『隆季集』の依拠したのは日次系『草根集』なのか、類題系『草根集』なのか、いずれの系統なのであろうか。この点を明らめるために、『隆季集』の「冬」部の次の七首を吟味してみよう。

(36)しくれには思ひそ出ぬ白露にあらそひ置しねやのあふきを
（浦時雨（ママ）・三一九）

(37)まくらかのこからし吹て窓うつや渡らぬ浪のしくれ成らん
（枕上時雨・三二〇）

(38)草も木も霜のからすといへる名のなきをつれたる松の色哉
（松霜・三二一）

(39)さすか猶ゆくとし積る霜の松下葉色付散る嵐かな
（松間霜・三二二）

(40)木の間もる日影にさへてさゝの葉の太山は霜に曇色哉
（篠（ママ）・三二三）

(41)日影さす軒端の霜のまたきよりたかぬあさけを立るさと人
（あしたの霜・三二四）

(42)山川や朽て跡なき橋けたに絶〳〵かゝる冬のあさかせ
（橋上霜（ママ）・三二五）

この七首を『草根集』の両系統の伝本と比較するに、両系統とも、(36)・(40)・(42)の歌題を「閨時雨」・「篠霜」・「橋霜」として収載しているので、『隆季集』がどちらの伝本に依拠しているかは分明でない。ただ、(42)の歌に『隆季集』が「橋上霜」の歌題を付したのは、類題系『草根集』がこの歌の直後の例歌に「橋上霜」の歌題を付しているので、それを『隆季集』の編者が誤記した可能性は臆測されよう。ところで、この七首の『草根集』内での配列順序をみるに、類題系統では、五一〇九・五一一〇・五一七七・五一七八・五一八四・五

二〇七・五二一二（ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会編『草根集二』の歌番号による）のごとく整然としているのに、日次系統では、一〇四〇一・四一六一・七七六〇・一〇〇二八・九六五・一六二・八二九三（『私家集大成5』所収の書陵部蔵『草根集』〈五一〇・二八〉の歌番号による）のとおりアト・ランダムである。この点から、『隆季集』が正徹の歌を採録する際に依拠した『草根集』はおそらく、類題系であったろうと推察されよう。そして、『隆季集』が類題系『草根集』に依拠していることは、『隆季集』に類題歌集『古今六帖』からの採歌があることと関連するが、同時に、『隆季集』の収載歌がほぼ題詠歌で独占されているという性格を確認するであろう。

ところで、これらの題詠歌の手本ともなるべき歌はほぼ原拠資料に付された歌題下に配置されて、『隆季集』の編者の手は加わってない感じがするが、『宝治二年歌合』からの次の春部の

(43)雲の上の山も木高き桜花みよのさかりの春にあふらん
（芳野ゝ花を・九六）

(44)みよしのゝ高木の山の桜花空より外ににほふいろかな
（翫花といふことを・九九）

(45)尋ねいる花より花に日数経て山路の末にいくよとまりぬ
（花を尋るこゝろを・一〇一）

の三首をみるに、いずれも同歌合では「山桜」の歌題が付いているのに、『隆季集』では注記のごとき歌題が付いている。この原拠資料と『隆季集』との歌題の異同は、『隆季集』が注記のごとき歌題（詞書）を付した類題歌集から採歌した可能性も推定されなくはないが、目下、そのような歌書は見出し得ず、ここは『隆季集』の編者が例歌にもっとも即するように歌題を改訂した結果と考慮するのが妥当ではあるまいか。というのは、『俊成卿女集』の「洞院摂政家百首」からの抄出歌である、すでに引用した(1)の歌の歌題が、原拠資料では「霞」であるのに、『隆季集』では「浦のかすみを」となっていて、そこに編者の賢しら（改訂）が認められるような事例が他にいくつか指摘されるからである。ここに、『隆季集』の編者の、基本的には手本とすべき例歌および歌題はそのままの形で転載するけれども、例歌により適切な歌題表記が可能な場合は、あえて原歌題を改訂するという収載方針を見出すことができよう。その意味で、『隆季集』の収載歌および歌題には、編者の好尚の反映がいくらかみられるといえようか。

かように、『隆季集』の収載歌は、『古今六帖』からの優雅で知的趣向的な歌、「特に新古今以後の歌壇に迎えられて少なからぬ感化を与えた」[3]俊恵・頼政・長明などの歌林苑歌人の詠、後嵯峨院歌壇の所産たる『宝治二年歌合』からの二条派流の温雅にして類型的な歌、室町前期の特に応永期に活躍した為尹や宋雅、室町後期の特に明応・永正期の歌壇の実質の担い手であった肖柏などの、平明にして典型的な古典情趣の歌など、いずれも題詠歌の模範となるような性格の歌がほとんどであるといっていいようなかにあって、二条派流の歌とは趣を異にする正徹や俊成女などの詠が『隆季集』にはかなり収載されているが、この点はいかに考慮されるであろうか。思うに、正徹と俊成女の詠が『隆季集』にかなり収載されているのは、正徹が『正徹物語』で、「恋哥は女房の歌にしみ入りて面白きはおほき也」と指摘して、式子内親王・俊成女・宮内卿の詠を各々引用した後に、「俊成女の、哀れなる心長さのゆく末ともみしよの

夢をたれかさためん　極まる幽玄の哥也」（日本古典文学大系本）と俊成女の恋の歌を評価していることや、また、心敬・宗祇らの連歌師に混じって正徹の言説を多く引用して、和歌・連歌の作法等に関する雑談を集めた『兼載雑談』に、恋の歌の手本として、「下もえにおもひきえなむ煙だにあとなき雲のはてぞかなしき　俊成女　これらを恋の本と被し申き」（日本歌学大系本）と俊成女の歌が賞揚されていることから明白なように、『隆季集』の編者は両者の歌を同系統のものと解していたからであろう。ところで、この両者の詠も、歌題をいかに詠みおおせるかという参考歌としての観点に立つならば、題詠歌の恰好の材料たり得ることは言を待つまい。ここには、『隆季集』の編者の好尚の反映があることはいうまでもなかろうが、同時に、『隆季集』の成立時期の時代的好尚の反映もあるように思われる。

要するに、『隆季集』は編者の好尚とその時代性を反映した、題詠歌を詠むうえで模範たり得るような「古」「今」の歌で撰集された詞華集（アンソロジー）であるといえるであろう。

四

それでは、『隆季集』の成立時期はいつであろうか。この問題に示唆を与えるのは、すでに言及した「右隆季集右京亮量胤之本全（ママ）／備用写留者也（ママ）／于時明応二年林鐘中旬／尚保在判」なる奥書で、明応二年（一四九三）六月中旬に、右京亮量胤の所持する『隆季集』を、尚保が書写した由である。しかし、量胤も尚保も、管見の範囲ではその生没年も伝記的事績もまったく不明であるので、奥書の記事に信憑性があるのか否か判断がつきかねる。そこで、『隆季集』の内部徴証としてその成立時期を示唆する事例を探求するに、『草根集』『肖柏千首』『桜井基佐集』からの抄出歌を『隆季集』が収載しているという事実に逢着する。すなわち、これら三作品の成立時期が判明すれば、『隆季集』の成立時期の上限はそれより以降ということになる。

まず、『基佐集』からの抄出歌は

(46)神わさのたえぬみあれに葵草いくよかけても色はかはらし　（葵・一五四）

(47)かひかねにいよふ（ママ）月ののほるまて旅ねくるしきさよの中山　（嶺月・二九七）

の二首で、島原松平文庫本『基佐集』（『私家集大成6』所収）によれば、(46)は「よしかたの入道」、(47)は基佐の詠だが、(47)の三・四句が「ふくるまていねもやられぬ」とある点で多少の疑問が生じなくもないが、『基佐集』収載歌と判断して差し支えなかろう。その『基佐集』の成立時期については、久曽神昇氏が「詞書、ことに他人の歌の詞書などを見るに、……晩年になって、詠草書留などを資料として整理したものであろう」[4]とされるのに対して、稲田利徳氏は「晩年の成立かいなかは、まだ確定できない。」[5]と判断を保留されているように、いまだ決定をみていない。そこで、桜井基佐の生没年だが、いずれも未詳とはいえ、稲田氏によれば、「文明・明応・永正のころに活躍した」[6]由であるから、『隆季集』の奥書の明応二年は一応信ずるに足る記事と判断してよかろう。

次に、『肖柏千首』の成立時期だが、これについては、

(48)夕暮のおなし乱を秋の風露にまかせよ野辺のかるかや　（苅萱・二六一）

(49)さのみなとふるゐも宿をかるかやの跡まて風は吹乱るらん
（おなし・二六二）

の二首が、(48)が肖柏、(49)が宋雅の詠で、『詠千首和哥上宗雅（ママ）牡丹花』（内閣文庫本二〇一・四八四）に「苅萱乱風」の歌題下に収載をみるので、いわゆる『宋雅肖柏千首』の成立時期を問題にすればよい。この『宋雅肖柏千首』の成立時期については、同書の巻末に、『宋雅千首』のものとおぼしき「応永廿二年十月日」なる記事と、「文明元年初秋漢羽林郎将藤原為広」なる記事（実は、これは為尹の奥書）に続いて、「大永七年丁亥十一月十四日」（書陵部本の奥書には、続けて「九州肥後住人水俣瑞光書之」とある由）の記事があって、大永七年の記事が示唆を与えよう。しかし、井上氏によれば、「大永の奥書が両千首にかかるとすれば已に両千首は合せられていた訳だが、そう簡単にも断ぜられまい。」[7]ということで、『宋雅肖柏千首』の成立時期は現在のところ分明でないといわねばなるまい。ところで、牡丹花肖柏は嘉吉三年（一四四三）生誕、大永七年（一五二七）没の歌人・連歌師であるので、『隆季集』の奥書に記す明応二年は肖柏五十歳に当たるので、『隆季集』の奥書の記事には大いに信憑性があると判断されよう。

最後に、類題系『草根集』の成立時期だが、現存諸本では、野坂元定氏本『草根集』の奥書に「永正三年臘月日」、京大付属図書館本『草根集』の奥書に「于時永正二年従孟夏至初冬漸書之早」と記す記事がもっとも古く、稲田利徳氏によれば、その成立は「少なくとも室町末期には成立していた。」[8]由であるが、その正確な成立時期は現在のところ確定していない。ところで、類題系『草根集』は日次系『草根集』に依拠して成ったはずで、松下正広が日次系『草根集』を編んで、一条兼良に序を要請したのが文明五年であるから、類題系『草根集』が『隆季集』の奥書記事の明応二年ごろに編纂された可能性は充分あるであろう。ここにも、『隆季集』の奥書記事は信憑性を有すると判断されよう。

以上の『桜井基佐集』『肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の検討から、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月という記事は信用するに足る内容であることが判明した。したがって、『隆季集』の成立時期の上限は少なくとも明応二年六月中旬以降と推定してほぼ誤りはないといえよう。となると、この時期は、文明後期歌壇の最高指導者で、三条西実隆・姉小路基綱などの公家や地方大名の歌道師範となって活躍していた飛鳥井雅親が没した直後ではあったが、作歌活動は活発で、宮廷では歌学研究も盛んに行われて、『風雅集』から『新続古今集』歌の類句集たる『新編和歌類句』（延徳二年成立）や、万葉歌の事項索引ともいうべき『万葉類葉集』（延徳三年成立）などの作歌手引書も生まれる一方、連歌の方面でも、宗祇を中心に肖柏・宗長等が活躍、『連秘抄』（長享三年成立）や『下草』（明応二年成立）『新撰菟玖波集』（明応四年成立）などの作品が生まれているので、『隆季集』もこうした歌壇の趨勢や時代を背景にしての所産と考慮すれば、その性格、存在意義も理解されよう。すなわち、「古」「今」の題詠歌の手本ともなるべきような詠歌で撰集されている『隆季集』の存在意義は、その成立時期における作歌の規範となるべき題詠歌の詞華集を編纂、提供しようと企図した編者の実践結果にあったということができるのではあるまいか。その編者には、肖柏・基佐など連歌に関わる人物の詠歌を収載していることなどから、連歌と関わる歌人などが想定されようが、具体的人物

となると、目下のところ、確証が得られないので、編者の問題は今後の課題にせざるを得ない。また、『隆季集』なる集名も巻頭歌の詠歌作者が不詳のため、これまた、何故にかかる集名となったのか分明でない。

なお、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月中旬なる記事は、現在その成立時期が分明でない、『桜井基佐集』『宋雅肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の下限を、それぞれ明応二年六月中旬より以前と規定する意味で、『隆季集』のこれらの作品の成立時期の問題を究明するうえで果たす役割は計り知れないものがあるといってよかろう。この点、『隆季集』の内容そのものの有する価値とは別個の、いわば派生的価値とでもいうべき性格のものであろうが、『隆季集』の価値を側面から高める貴重な要素になっていることには相違なかろう。

注

(1) これは『古今六帖』収載歌で、作者注記のない歌数で、具体的には、『隆季集』の収載歌の典拠および作者の整理のところで歌番号を指摘しておいた。

(2) 『為家千首』とはいっても、藤原為家がみずから出題した『前大納言為家卿中院亭会千首』のことで、慶安三年版『明題部類抄』には、当該歌題が掲載されている。

(3) 『和歌文学大辞典』の「俊恵」の項（田中裕先生執筆）。

(4) 『群書解題 第九』（昭和35・11）の「桜井基佐集」の項。

(5) 稲田氏「桜井基佐の作品における俳諧的表現」（『連歌俳諧研究』第四〇号、昭和46・3）。

(6) 注5に同じ。

(7) 井上宗雄氏『中世歌壇史研究の室町後期』（昭和47・12）の二〇六頁。

(8) 稲田利徳氏『正徹の研究』（昭和53・3）の五四三頁。

〔付記〕 本稿を草するに際して、貴重な御架蔵の『隆季集』写本一冊を貸与してくださった、井上宗雄氏に深謝申しあげる。なお、本稿の概要の一部は和歌文学会第二十八回大会（昭和57年10月10日、於共立女子大学）で発表したが、その際御示教賜った、井上氏をはじめ、福田秀一・島津忠夫・鶴崎裕雄の諸氏にも御礼申しあげる。ちなみに、本書は『花園大学研究紀要』第十四号（昭和58・3）に翻刻したので、御参看賜りたく思う。